

広島大学大学院教育学研究科紀要 第三部 第68号 2019 81-89

ドイツにおけるコルチャック研究の動向

— 全集 „Janusz Korczak Sämtliche Werke“ (1996-2010) の刊行を契機として —

松浦 明日香
(2019年10月3日受理)

Research Trends in Janusz Korczak's German Works:
Janusz Korczak Sämtliche Werke (1996-2010)

Asuka Matsuura

Abstract: A Polish doctor, author of juvenile literature, and an orphanage director, Janusz Korczak lived with children until his death in the Treblinka concentration camp. The United Nations' Convention on the Rights of the Child is said to be based on his ideas of the rights of a child. Korczak's rights of a child are famous as the Magna Carta Libertatis, i.e., the right of a child to his/her own death, the rights of a child to the present day, and the right of a child to be what he/she is. Korczak's thought and his life are vigorously studied in Poland. Likewise, Korczak's thought and praxis are also widely appreciated in Germany. The collected works, *Janusz Korczak Sämtliche Werke*, were published in 18 volumes between 1996 and 2010, including supplementary volumes, while Deutschen Korczak-Gesellschaft e.V. has been publishing information and trends in Korczak research in Germany since 1997. Particularly in the field of pedagogy, Germany is the center of Korczak studies and many papers and dissertations have been published in academic research. This study clarifies the characteristics of the acceptance and development of Janusz Korczak's thought in Germany, with a focus on the turning point of the publication of the collected works *Janusz Korczak Sämtliche Werke* (1996-2010).

Key words: Janusz Korczak, The Rights of the Child, Germany,

Collected works „Janusz Korczak Sämtliche Werke“

キーワード: ヤヌシュ・コルチャック, 子どもの権利, ドイツ, ドイツ語版『ヤヌシュ・コルチャック全集』

I. 研究の目的と対象

経済至上主義、競争社会とさまざまな言葉で揶揄される現代を生きる多くの人々が、言葉や情報が溢れ、表現する方法が多様かつ多くあるにもかかわらず、自分がどのように生きたいかと声に出すことはおろか、考えを巡らせる余裕すら持てず日々をやりこなしている。日本国憲法によって定められている、人は生まれながらにして幸福に生きる権利を有するが、自らの幸福追求、自分自身の権利を権利享有主体、あるいは、権利行使主体として自覚している人々はそう多くはないように思われる。こうした社会状況を打ち砕くべく

契機となったものに、子どもの権利がある。

子どもの権利に関する議論が国際的に盛んになったのは、1989年の国連総会で採択された「子どもの権利に関する条約 (Convention on the Rights of the Child)」(以下、「子どもの権利条約」とする)の成立である。この「子どもの権利条約」の草案の基になったと言われているのが、ポーランドの教育実践家であるヤヌシュ・コルチャック (Janusz Korczak, 1879-1942) の「子どもの権利」の思想である。コルチャックは、子どもたちに権利を行使すること、尊重することを教えようとした。子どもの権利を考えることは、それを保障していく大人の権利や生活をかえり

みることでもある。子どもが自らの最大の発達のために大人の支援を必要とする存在であるがゆえ、子どもの人権はそれを守り尊重し、育む大人の人権保障とも関係しているのである。すなわち、現実的に子どもの権利の保障を考えると、それが実現可能な大人たちの生活の営みにおいて叶うものなのである。子どもの権利が保障されているかどうかの問題は、大人自身が十分な生き方ができているかという問題に集約されていく。子どもの生活が大人の生活や社会を映し出し、子どもの権利を捉え直すことは、大人、否、人間そのものの権利を問うことになる。では、考えられるべき子どもの権利とは何か。ここで今一度、子どもの権利とは何かが問われる必要がある。

コルチャックの著作をまとめたポーランド語版『ヤヌシユ・コルチャック全集 (Janusz Korczak dzieła)』が刊行されたのは、「子どもの権利条約」が採択された後の1992年であった。コルチャックは医師や孤児院の院長として働く傍ら、執筆活動にも精力的に取り組んだ。彼の著作は、第二次世界大戦後になって、アルゼンチン、ベルギー、デンマーク、旧東西ドイツ、フランス、イタリア、旧ユーゴスラビア、オランダ、オーストリア、ルーマニア、旧ソ連、スウェーデン、スイス、スペイン、トルコ、ハンガリー、さらには日本といった国々で徐々に翻訳出版されることとなる¹。

わが国におけるコルチャック研究は、1978年に日本で初めてコルチャックに関する著作が劇作家の大井敦雄²によって発表され、1990年代には近藤二郎および近藤康子によってその生涯が紹介³されている。また、コルチャック作の児童書「マチウシー世」の翻訳・出版⁴などを通じて、コルチャックの児童文学は幼児教育の分野においても取りあげられることとなる⁵。コルチャックの子どもとの関わりと権利条約との関係⁶についてはもちろんのこと、近年では、コルチャックの思想と実践が彼の三つの子どもの権利を中心として教育学の領域でも検討されている。彼の教育学思想をドイツのコルチャック研究を引き合いにしながら「教育的行為の診断学」と捉える石川道夫の研究⁷や、コルチャックの「子どもの権利」の思想の歴史的形成過程を明らかにした塚本智宏の研究⁸などがなされてきている。さらにコルチャックの教育思想と実践、そして教育学の内実を明らかにすることを試み、そこから教師教育を構想する小田倉泉の研究⁹や、孤児院「ドム・シエロット (Dom Sierot)」の設立とその歴史的背景、および孤児院での実践や学生時代に参加していた慈善活動について研究を行っている大澤亜里の研究¹⁰を中心として、コルチャックの思想と実践についての本格的な教育学議論が展開されてきている。こう

したポーランド語の原典あるいはロシア語を介したわが国におけるコルチャック研究は、国際コルチャック会議といった国際的なコルチャックを見直す動向¹¹とも連動しながら精力的に進められてきているといえよう。

しかしながら、わが国においてはコルチャック全集をはじめとしたコルチャックの著作の紹介が限定的であることにも起因して、コルチャックの「子どもの権利」思想とその実践の教育学の意義の考察は、その思想の形成とコルチャックの生涯との関連づけに留まってきた¹²。それに対して、コルチャック全集の翻訳と再構成に着手し、研究ネットワークの構築と積極的な学術的発信を行ってきているのがドイツである。ドイツ語版『ヤヌシユ・コルチャック全集 (Janusz Korczak Sämtliche Werke)』は、ポーランドとドイツという戦後処理にも関わる関係性の中で、ドイツ固有の解釈に強調点が置かれながら、ポーランド語版全集の刊行の直後の1996年から刊行されている。

このドイツ語版全集の刊行を主導したドイツにおけるコルチャック研究の第一人者が、フリードヘルム・バイナー (Beiner, F.) である。彼を編集代表に、ダウツェンロート (Dauzenroth, E.) やウンゲルマン (Ungermann, S.) といった中心的な編者らの下で、ドイツ語版全集は1996年から2010年にかけて1～16巻及び補巻二冊を合わせた全18巻にわたって刊行された。本全集の刊行は、「ドイツコルチャック協会 (Deutschen Korczak-Gesellschaft e.V.)」の設立と同会による『コルチャック紀要 (Das Korczak-Bulletin)』の刊行にみられるように、ドイツにおけるコルチャック研究の礎となっている。こうした取り組みが、教育学領域におけるコルチャックをテーマとした多くの学位論文の執筆へと直接的につながっている。1972年にコルチャックに贈られたドイツ書籍出版平和賞だけではなく、その名を冠する学校がドイツ全土に少なくとも50校以上存在していることにも、第二次世界大戦下のナチス政権の被害者と加害者という歴史の影響を見ることができ¹³。

本研究では、ドイツ語版の全集 „Janusz Korczak Sämtliche Werke“(1996-2010)の刊行を契機として、コルチャックの思想と実践がドイツにおいてどのように受容され、どのようにコルチャック研究が展開されてきたのかについて検討する。まず、ドイツ語版全集がどのような経緯で刊行され、どのような構成でコルチャックの足跡と関連しているのかを明らかにする。そして、全集刊行を契機とするドイツ教育学におけるコルチャック研究の動向を整理する。

II. ドイツ語版全集刊行の経緯¹⁴

第二次世界大戦後、徐々にコルチャックの原典は、アルゼンチン、ベルギー、デンマーク、旧東ドイツ、旧西ドイツ、フランス、イタリア、旧ユーゴスラビア、オランダ、オーストリア、ルーマニア、旧ソ連、スウェーデン、スイス、スペイン、トルコ、ハンガリー、さらには日本で刊行されるようになる。コルチャックの祖国ポーランドにおいても、1992年にポーランド語で『ヤヌシュ・コルチャック全集』が刊行されている。コルチャックが生きている間に、多くの論文や文学作品、書籍が増刷されてはいたものの、全集や選集が刊行されることはなかった。そうしたポーランドの文脈において、全集の刊行は新しい次元を開いていくものとなった。しかしながら、全集の刊行には、長い歳月を要した。1945年以降のポーランドは、「ポーランド人民共和国」へと至る途中であり、国全体がわずかな結束力しかなく、コルチャックの教育的な考えや理想に対して影響を受けやすかった。しかし、その一方で、個性や人権感覚を育てる教育やユダヤ的な思考や承認が「ポーランド民族」という歴史的な経過の中へ持ち込まれ、受け入れられ、さらにそれらに関する書物が出版されることはいまだに困難であった。そうした背景の中で、コルチャックの人生や学問的な意義は、文芸学の背後に埋もれていったのであった。しかしながら、その水面下で、コルチャックの孤児院で暮らした人々や研究者たちによって、コルチャックの作品や伝記が集められ、全集の刊行に向けての準備は進められていた。また、イスラエルにおいてもポーランド語から翻訳された選集が出版されるようになる。イスラエルやポーランド以外にも、旧ソ連やアメリカにおいて選集作品が登場し、1967年より、東西ドイツ統一の動きがある中で、旧東ドイツにおいて最初の選集版が刊行された。

ポーランド語の全集『ヤヌシュ・コルチャック』の出版意図は、年代研究やテーマの焦点化であった。1992年にこのようなコンセプトのもとで、ポーランド語版全集の第一巻が国際的な支援とともに刊行された。そうこうするうちに、1996年までには、ドイツ連邦共和国にとって共同的なコルチャック研究に必要不可欠な基礎となるために達成されるプロジェクトの計16巻にとっても重要となるポーランド語版全集計6巻ができあがっている。

ドイツ語版コルチャック全集刊行に向けた構想のコンセプトは、コルチャックの作品がドイツ語に翻訳されるようになってから今日までの約半分ほどのコルチャックの作品の成立段階にある。コルチャックの執

筆活動は1896年9月26日の「黄金の結び目」という題の刊行物に始まり、1942年8月4日に書かれた「日記」の最後の記事で終わる。この期間に24本の単独著書と1000本の雑誌論文が出版された。また2本の脚本が上演され、ラジオ講演の多数が放送された。ある脚本やいくつかのラジオ放送によってテキストの形式が保存された。それに加えて、いくつかの原稿、手紙、文書、とりわけ、ゲッター時代からのものがある。この広範囲に広がりのある作品のほとんどは、ドイツ語版『ヤヌシュ・コルチャック全集』において議論され、言及されている。構想されたコルチャックの創作期を顧慮に入れると、ポーランド語の編集者たちとの親密で友好的な共同作業の中で、ドイツ語版『ヤヌシュ・コルチャック全集』は仕上げられた。

その際、ドイツ語版は存在する原資料やテキスト資料や同様にポーランド語のいくつかの巻の改訂にも手をつけたにもかかわらず、テキストに対する指示や注釈と同様に解釈の際に固有の強調を置くことは、双方の言語圏の異なる経験の背景や期待の背景を必要とした。翻訳の問いを解決すること以前に、まず第一に著者の言語におけるテキストの原本の純粋な言語の問題が取り扱われなければならないことが最終的には最も明白な結果を生み出した。その一方で、固有の言語文化の特徴を持つ異なる言語圏の中で翻訳を通して、固有の注釈や解釈が必要不可欠となった。それ以外にも、ドイツ語版でのコルチャックのテキストは、ポーランド語版の全集のものよりも異なる視点で編成された。

ドイツ語版全集のための翻訳に基礎が置かれた文献はとりわけ第1巻から成っている。手書きのものあるいは文筆の草稿は、わずかな構想やいくつかの原稿や手紙を除いて、跡形もなくなっている。最も重要で救われた原稿は「日記」、脚本「気の狂った元老院」、「ゲッター」からの資料である。原本の大部分はポーランド語での出版物である。いくつかはヘブライ語とユダヤ語にのみ翻訳されたものがある。ほとんどの短いテキストにおいては今日までコルチャックが原作者であることのはっきりとした推論されてきた。これに関する全ての根源的な問いは、一つのテキストに対する注釈の中やテキストの中の脚注に表れる翻訳の問題として取り上げられる。

III. コルチャックの足跡とドイツ語版全集の構成

コルチャック¹⁵は、帝政ロシア領ポーランドのワルシャワに生まれ、ポーランドに同化したユダヤ人家系の出身であった。彼は、大学では医学を専攻し、日露

戦争、第一次世界大戦中には軍医の経験を経て、医師や児童文学作家といった活動と並んで、1912年にユダヤ人の子どもたちのために設立された孤児院「ドム・シエロット」の院長となり、以後30年間にわたり、子どもたちと生活を共にした。彼は1942年8月6日に、孤児院の200人の子どもたちとともにワルシャワゲットーからトレブリンカ強制収容所に向かった。コルチャックが世界的に注目されるようになったのは、第二次世界大戦後のことである。コルチャックは、帝政ロシアの厳しい支配下の元で過ごした幼少・学生時代を通して、「世界を改革することはすなわち教育を改革することである」¹⁶という教育に対する重要性と可能性を見出し、医者として子どもと関わることや戦争で犠牲になっていく子どもたちを軍医として目にするを通して、「子どもはすでに人間である」¹⁷という子ども観を形成した。そして、これらは、その後の孤児院での実践やコルチャックの生涯全体を貫いている。

コルチャックは医学生や医師として学んだ医学的な知識や技術を、「観察する、記録する、解釈する」という方法として教育学へと展開させた¹⁸。すなわち、コルチャックの教育学的な行為には、医師として患者を診察する際の観察が根底にあり、目の前にある事実から根拠を見出すことによる子ども理解という姿勢が表れている。彼は1919年に建てられた孤児院「ナシュ・ドム (NaszDom)」の経営にも携わっている。

コルチャックの子どもを理解しようとする姿勢には、「私は(子どもを-註:引用者)知らない」¹⁹という意識が常に存在していた。これは、大人に子どもに対する狭い価値観からの脱却を要求している。コルチャックにとって子どもは人間の尊厳と人間の権利への要求を持っており、さらに教育において子どもは客体へととなってしかるべきというのではなく、その行為の主体である²⁰。さらに、コルチャックは大人に子どもの手本や道しるべになること、または、みずからすすんで子どもの教育に取り組むことではなく、自由に対する要求を子どもに認め、子どもが大人と同じ価値のあるものであるとする子どもの権利を子どもの中に取り立てることを要求した²¹。

コルチャックの思想や実践は、彼が「自由のマグナカルタ (Die Magna Charta Libertatis)」と称する三つの子どもの基本的な権利としてよく知られている。すなわち、「死に対する子どもの権利 (Das Recht des Kindes auf den Tod)」, 「今日という日に対する子どもの権利 (Das Recht des Kindes auf den heutigen Tag)」, 「あるがままでいることの子どもの権利 (Das Recht des Kindes, das zu sein, was es ist)」である。

ポーランド語の全集については、先述した塚本が全集の各巻の刊行年と全集に収められている主な作品名について言及している。1992年刊行の第1巻には、「街頭の子」, 「サロンの子」。1998年刊行の第2巻には、「編み篋」, 「ユーモアと風刺時評」。1994年刊行の第3巻には、「演壇にて: 社会評論」, 1998年の第4巻には、「生活の学校」, 「病院の光景; 教育論文と医学論文」。1997年刊行の第5巻には、「モシキ, ヨシキとスルーレ」, 「ユジキ, ヤシキとフランキ」。1996年刊行の第6巻には、「栄光 (名声)」, 「短編小説」。1993年刊行の第7巻には、「子どもをいかに愛するか」, 「教育の契機」, 「子どもの権利の尊重」。1992年刊行の第8巻には、「王様マチュシー一世」, 「孤島の王様マチュシ」。1994年刊行の第9巻には、「若きジャックの破産」, 「もう一度子どもになれば」。1994年刊行の第10巻には、「狂人の議会」, 「散文詩」, 「ラジオ作品」。1997年刊行の第11巻には、「生活の規則」, 「子どものための時事評論」。1998年刊行の第12巻には、「魔法使いのカイトウシ」, 「頑固な少年の物語」, 「短編小説」。1996年刊行の第13巻には、「理論と実践: 教育論文」。第14巻から第16巻については、刊行年は不明となっているが、第14巻には、「日記」, 「リスト」, 「ヴァリア」, というものが、第15巻にはヤヌシュ・コルチャックの人生と活動そして作品の年表が、第16巻には、文献目録や索引が収蔵されている²²。

同様に、ドイツ語版『ヤヌシュ・コルチャック全集』の第1巻～第16巻の目次は、コルチャックの著作からなっているが、配列はポーランド語の全集とは、まったく同じではない。第1巻は、「街頭の子ども」, 「サロンの子ども」。第2巻は、「ユーモレスク」, 「風刺文学」, 「愚かなもの (Albernes Zeug)」。第3巻は、「赤ちゃん (Bobo)」, 「取り返しのつかない一週間」, 「蝶々の告白」, 「もう一度子どもになれば」, 「生活の規則」, 「孤独について」。第4巻は、「いかに子どもを愛するか」, 「教育の瞬間」, 「尊敬に対する子どもの権利」, 「おもしろい教育学」。第5巻は、「春と子ども」, 「神と共に一人」, 「べらぼうに短い (Unverschämt kurz)」, 「気の狂った元老院」, 「人間は良きものである」, 「ヘルシンキの3つの旅」, 「聖書の子どもモーセ」。第6巻は、「歴史と物語」, 「教訓と観察」, 「スイス旅行」。第7巻は、「社会批判の新聞学」, 「生活の学校」。第8巻は、社会医学の著作。第9巻は、教育的な著作。第10巻は、「サマーコロニーからの印象やメモ書き」, 「モシキ・ヨシキ・スルーレ」, 「ユジキ・ヤシキ・フランキ」, 「名声」。第11巻は、「王様マチュシー一世」, 「孤島の王様マチュシ」。第12巻は、「小さなジャックの破産」, 「魔法使いのカイトウシ」。第13巻は、「頑固な若者」, 「子ど

もや若者のためのジャーナリズム」, 「孤児院の報告と歴史」。第14巻は, 「小さな展望」, 「ハヌカとプリム祝日の場面」。第15巻は, 「手紙やパレスチナの旅行」, 「戦争とゲットー時代の記録」, 「日記と思い出」, 「雑報」。第16巻はコルチャックの生涯等が書かれている²³。

以上, これまでに述べてきたコルチャックの足跡と, コルチャックの著作およびポーランド語版全集, さらにドイツ語版全集との対照を関係づけて一覧にしたものが【表1】である。

IV. 全集刊行を契機とするコルチャック研究の動向

ドイツにおいてコルチャックは, 1972年にドイツ出版社・書籍販売店協会よりドイツ書籍出版平和賞を受賞する。平和の思想の実現に向けた文学, 学問, 芸術の領域における業績が認められての受賞であった。コルチャックへの注目が教育学の文脈において際立ってくるのは, 1989年の国連による「子どもの権利条約」の採択およびポーランド語版『ヤヌシュ・コルチャック全集』の刊行に負うところが大きい。このポーランド語版全集の発刊を追うようにして, バイナーによるドイツ語版『ヤヌシュ・コルチャック全集』の刊行によって, ドイツ教育学におけるコルチャック研究が多様にかつ多層的に展開されることとなる。ドイツにおけるコルチャック研究を支える研究ネットワークが, 1977年に設立された「ドイツコルチャック協会」の設立である。「ドイツコルチャック協会」は, 「オーストリアヤヌシュ・コルチャック協会」と「スイスコルチャック協会」との共同提携の中で設立され, 1992年からは『コルチャック紀要』を年に一巻発刊している。

同紀要は1992年に当時ヴッパータール大学の教授だったバイナーとギーセン大学の教授だったダウツェンロートによって創刊され, 教育的な実践や道標に教育的な指標, 同様に国際的な水準でのコルチャックに関する行事予定表の打ち合わせなどの報告といった今日的な議論も掲載され, 一巻につき約10本の論文や実践報告が掲載されている²⁴。

全集の刊行は, コルチャックの人物史やその教育的業績に触れる著作の刊行も促している。例えば, 2012年にはコルチャックの足跡がまとめられ²⁵, 2017年にはコルチャックの果たした実践的意義についての著作²⁶が刊行される。こうしたコルチャックの生涯をテーマとする著作群だけではなく, 教育学者としてのコルチャックに言及する著作は, 主に全集の刊行をリードした編者たちによって刊行されている。ダウツェンロート (Dauzenroth, E.) は, コルチャ

クの人生について言及した著作を刊行し²⁷, ウンゲルマン (Ungermann, S.) は教育学者であり教育学者としてのコルチャックを描き出している²⁸。キルヒナー (Kirchner, M.) は, 子ども期の研究者としてのコルチャックに着目して「子どもについての創造的無知」をテーマに著作を刊行している²⁹。

むろん, 人権と教育との関係に関わる著作の中でも, コルチャックが果たした子どもの権利に対する議論の貢献の重要性も取り扱われている³⁰。また, 民主主義社会における政治教育の文脈においても, 人権や子どもの権利をいかに教えるのかという考察もコルチャックに言及しながらなされてきている³¹。

ドイツの教育実践におけるコルチャックの影響の一端は, コルチャックの教育思想を学びながら教育実践に携わるシュタイガー (Steiger, S.) らのような取り組みにも見て取ることができる。彼は『コルチャック紀要』の編集にも携わりながら, コルチャックの孤児院の劇を今日の教室において実践する演劇を通じた教育実践に取り組み, その成果を2015年にまとめている³²。その他にも「ヤヌシュ・コルチャック」の名を冠する学校が, ドイツ全土には少なくとも50以上存在している。そのうちの一枚である「パンコウ ヤヌシュ・コルチャック中等学校 (Janusz-Korczak-Sekundarschule Pankow)」では, 特色コース (Profilkurs) という選択科目の取り組みを通して, 子どもたちが自分にとっての学びを主体的に考える自由を保障している。すなわち, 子どもたち自身がコルチャックの子どもの基本的な権利の思想に触れるようなカリキュラム構成が重視され, 倫理学の授業のようにコルチャックを教材として日々の授業実践にコルチャックの思想を反映させる実践にも着手している³³。

こうした多様にかつ多層的に展開される教育学研究におけるコルチャック受容の中でも最も注目すべきはやはり, 「子どもの権利」に関わる研究動向であろう。バイナーは2007年にコルチャックの「子どもの権利」, とりわけ「尊敬に対する子どもの権利」に関わる論考を集め一冊の本として刊行している³⁴。これを基底として, 2009年には子どもの権利保障を子どもの「人権 (Menschenrecht)」としてテーマ化し, ドイツ教育学における子どもの権利条約と子どもの権利についての議論をまとめた著作が刊行される³⁵。また2013年には, ベルリン自由大学にて開催された国際シンポジウムの成果が, 「子どもの権利のバイオニア」としてのコルチャックというテーマのもとでまとめられている³⁶。

バイナー自身もウンゲルマンとともにコルチャックの国際的な注目とその受容の動向に目を向けてお

り³⁷、ドイツ教育学研究におけるコルチャック受容の独自性とその意義が世界的にも注目されてきている。

ドイツ教育学研究におけるコルチャック受容は、全集の刊行と今なお最新の研究動向を発信しつづける『コルチャック紀要』の創刊にその特質がある。その中でも、編集代表を務めたバイナーによるコルチャック教育学の研究は世界的なコルチャック研究の中でも、その権利の捉え方において際だった特質を有している³⁸。わが国においても小田倉（2008）では、「子どもの権利尊重の基本は、教師と子どもの相互の尊敬と信頼と愛情の関係であって、このような『尊敬の教育学』が実践され得るのは、教師が自分の教育を通して子どもが人間になるのではなく、子どもはすでに完全に尊敬すべき人間であるという認識で生活を共有し子どもを扱うときのみである」として、バイナーの「尊敬の教育学」の実践的意義に言及している³⁹。バイナーは、コルチャックの三つの子どもの基本的な権利である「自由のマグナカルタ」が、コルチャックの「尊敬に対する子どもの権利（Das Recht des Kindes auf Achtung / Prawo dziecka do szacunku）」にくくり上げられるものであるとし、そこから「尊敬の教育学（Pädagogik der Achtung）」としてコルチャックの教育学的意義を構想している。その際、バイナーはカントの「尊敬（Achtung）」の概念を引き合いに出しながら、コルチャックの「尊敬に対する子どもの権利」の独自性を検討している⁴⁰。そして、「尊敬に対する子どもの権利」における「尊敬」の概念を「大人が子どもを尊敬することで子どもに他者を尊敬することを教えるという、相互的な現象としての尊敬」⁴¹と意義づけている。バイナーは、コルチャックの思想と彼が提起する「子どもの権利」とを結びつけ、それを構造

化することによって、コルチャックを教育学の俎上に乗せようとした。

V. おわりに

「子どもの権利条約」の草案の基となったコルチャックの「子どもの権利」思想とその実践は、ドイツでは、ドイツ語版全集の刊行を契機に、受容されることになった。ドイツ語版全集は、コルチャックの生涯にわたる著作や活動を広く知らしめただけでなく、編集代表のバイナーやダウツェンロート、ウンガーマンらの精力的な取り組みが、コルチャックをドイツ教育学の俎上に乗せるための契機にもなった。さらにドイツのコルチャック研究は、コルチャックの「子どもの権利」の思想の内実や子どもに対する姿勢を検討するだけでなく、それを現代の教育で問うべき対象であるとし、いかに教育の中で実践的に実現できるかについて取り組んでいることに、研究の展開を見ることができるところには、子どもとともに強制収容所へと向かったその生涯を英雄視するのではなく、その教育学的意義を直視しようとするドイツ教育学においては、コルチャック全集のドイツ語版の刊行とその学術的検討を通じて、独自のコルチャック解釈が導き出されてきている。

今後の課題としては、戦時下ポーランドにおけるコルチャックの実践を、戦後ドイツの教育学がどのように捉えようとしたのかという研究課題と同様に、今日わが国の社会における「子どもの権利」に根差した教育のあり方をコルチャックの原点に立ち戻りながら、どのように構想するのかを実践に即して検討していくこととしたい。

ドイツにおけるコルチャック研究の動向

— 全集 „Janusz Korczak Sämtliche Werke“(1996-2010) の刊行を契機として —

表1 コルチャックの足跡とコルチャックの著作および
(出典：Beiner(1996), S. 469-487などをもとに筆者が作成)

教育実践者コルチャックの足跡	年	コルチャックの著作 ※()の中のローマ数字はポーランド語版全集の巻号を指す ※邦訳があるものについては文献の下に書誌情報を記す	ドイツ語版 全集との対応	ドイツ語版コルチャック全集 Janusz Korczak Sämtliche Werke Band 1-16
ポーランド・ワルシャワに生まれる	1878年			
プラスチックナジヤ入学	1891年			
父の死。コルチャックの家没落。アルバイトで母と妹を養う	1896年(18歳)			Band 1(1996) Kinder der Strasse. Kind des Salons.
ワルシャワ大学医学部入学 「さまよえる大学」にも学ぶ。ワルシャワ慈善協会(1814~1950)の施設で非合法の教育活動をはじめめる	1899年			Band 2(2002) Humoresken, Satiren, Albertines Zeig. Band 3(2000) Bobo. Die verhängnisvolle Woche. Wenn ich wieder klein bin. Regeln des Lebens. Beichte eines Schmetterlings.
スイス休職留学	1899年			Band 4(1999) Wie man ein Kind liebt. Erziehungsmomente. Das Recht des Kindes auf Achtung. Fröhliche Pädagogik.
医学部5年生として、ユダヤ人師弟のグループの「ミハウフカ」サマーキャンプ(夏期コロニー)にポランディア参加	1904年			Band 5(1997) Der Frühling und das Kind. Allein mit Gott. Senat der Verrückten. Die Menschen sind gut. Drei Reisen Herscheks.
	1906年(28歳)	「19世紀隣人愛思想の発展」(Rozwój idei miłości bliźniego w XIX wieku)		Band 6(2000) Geschichten und Erzählungen. Behlungen und Betrachtungen. Die Schweizreise.
	1906年(28歳)	『サロンの子ども』(Dziecko salonu) (I)	Band 1 (1996)	Band 7(2002) Sozialkritische Publizistik. Die Schule des Lebens.
	1909年(31歳)	『モシキ、ヨシキ、スルーレ』(Moški, Joski i Srule) (V) <ユダヤ人の子どもたちとの休暇村体験記>	Band 10 (1998)	Band 8(1998) Sozialmedizinische Schriften Band 9(2004) Theorie und Praxis der Erziehung. Pädagogische Essays 1898-1942
バリへ半年留学	1910年(32歳)	『ユジキ、ヤシキ、フランキ』(V) (Józki, Jaški i Franki) <ポーランド人の子どもたちとの休暇村体験記>	Band 10 (1998)	Band 10(1998) Eindrücke und Notizen aus Sommerkolonien. Die Mojscheks, Joscheks und Sruleks. Die Jozeks, Jasieks und Franelks. Ruhm.
(8月以前) ロンドンへ1ヶ月訪問	1911年(33歳)			Band 11(2002) König Macius der Erste. König Macius auf der einsamen Insel.
クロフマルナ「孤児の家」が運営を開始 コルチャックが孤児院院長	1912年	『不幸な一週間』(学校の生活より)	Band 3 (2000)	Band 12(1998) Der Bankrott des kleinen Jack. Kajtus, der Zauberer.
第一次世界大戦(〜18)が勃発し、大尉として軍隊召集	1914年(36歳)			Band 13(2003) Ein hartnäckiger Junge. Publizistik für Kinder und Jugendliche. Berichte und Geschichten aus den Waisenhäusern.
ロシア二月革命、十月革命	1917年(39歳)			Band 14(2005) Kleine Rundschau, Chanukka und Purim-Szenen
ポーランド樹立	1918年(40歳)			Band 15(2005) Briefe und Palästina-Reisen. Dokumente aus den Kriegs- und Ghetto-Jahren.
『子どもをいかに愛するか』の原稿を携え、ワルシャワ帰還。ポーランド独立。独立後のポーランドのユダヤ人人口300万人弱(全人口11%)。『孤児の家』での仕事を再開。家庭医の仕事再開。マリア・ロゴフスカ・ファルスカの経営する孤児院の「私たちの家(僕たちの家)」(Nasz Dom) <ポーランド人の子どもたちの施設>の医者および雇われ人としての仕事開始	1918年(40歳)	『子どもたちをいかに愛するか、家庭の子ども』(Jak kochać dziecko) (VII) (邦訳：塚本智宏(2007)「コルチャック先生の教育者教育 若い教育者へのメッセージ」著作からの抜粋・論文集『名寄市立大学紀要』第1巻、115-131頁にて一部訳出)	Band 4 (1999)	Band 16(2010) Themens seines Lebens, Kalendarium: Werkbiographie
	1919年	『教育の契機』(Momenty wychowawcze) (VII) (邦訳：塚本智宏資料紹介・訳、鈴木(大澤) 亜里共訳(2008)『ヤヌシュ・コルチャック著『教育の瞬間』』『名寄市立大学紀要』第2巻、49-95頁。)	Band 4 (1999)	
1919年から1920年ボロ戦争の間ポーランド軍隊の少佐の地位あって、伝染病病院に派遣、チフスに感染。	1920年(42歳)	『ただ一人神と—無信仰者の祈り』(Sam na sam z BogiemModlitwy tych, którzy się nie modlą)	Band 5 (1997)	
	1922年(44歳)	『王様マチュシ一世、小説』(Król Macius Pierwszy) <童話> (VIII)	Band 11 (2002)	
	1923年(45歳)	『孤島の王様マチュシ』<童話> (VIII)	Band 11 (2002)	
国際連盟、子どもの権利宣言(ジュネーブ宣言。第一次世界大戦で戦いをこらえた子どもたちの教育が主な目的)	1924年(46歳)	『若きジャックの遺産』<子供用読物> (IX)	Band 12 (1998)	
	1925年(47歳)	『もう一度子どもになったら』(Kiedy znów będę mały) (VIII)	Band 3 (2000)	
		『理論と実践』(Teoria a praktyka) (XIII)	Band 9 (2004)	
	1929年	『子どもの尊重される権利』(Prawo dziecka do szacunku) (VII) (邦訳：塚本智宏(1993)「コルチャック著『子どもの権利の尊重』(資料紹介)」『季刊教育法』第92号、92-108頁。)	Band 4 (1999)	
		『子どもをいかに愛するか』(第二版、補充版)		
3週間パレスチナ訪問	1930年	『人生の探(生活の規則)』(XI)	Band 3 (2000)	
	1934年	『魔法使いのカイトウシ』(XII)	Band12 (1998)	
パレスチナ6週間訪問	1936年			
8月、パレスチナ行きを決定(同年10月までに)。9月、ナチストドイツ軍がポーランド侵襲開始。11月、『孤児の家』がゲットーへ強制移動	1939年	『おもしろい教育学』	Band 4 (1999)	
5月、『ゲットー日記』(Pamiętnik)を執筆開始	1941年			
7月22日、コルチャックの誕生日に「ユダヤ人東方移動」の開始。8月6日、コルチャックとヴィルチンスカ、200人の子どもたち、そして、孤児院のスタッフは貨物移送所ウムシラグラッツに進行(トレブリンカ、即刻絶滅収容所へ移送)	1942年	『ゲットー日記』(Pamiętnik) (XIV)	Band15 (2005)	
4月、ワルシャワ・ゲットーのユダヤ人武装蜂起ゲットー壊滅	1943年			

【註】

- ¹ Vgl., Beiner, F. (1996): Gesamtwerk. In: Korczak, J.: *Janusz Korczak Sämtliche Werke*: Bd. 1, Kinder der Straße; Kind des Salons. (Herausgegeben von Beiner, F./ Dauzenroth, E.) Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus., S. 469-487.
- ² 大井数雄 (1978) 「ヤヌシュ・コルチャックの現実と虚構－ファシズムに抗したポーランドの児童文学の担い手」『教育』第28巻, 第4号, 118-121頁参照。
- ³ 近藤二郎 (1990) 『コルチャック先生』朝日新聞社, 近藤康子 (1995) 『コルチャック先生』岩波ジュニア新書, 参照。
- ⁴ 中村妙子 (1988) 『子どものための美しい国』晶文社, 参照。
- ⁵ 例えば, 津守真 (1989) 「ヤヌシュ・コルチャック」『幼児の教育』第88巻, 第3号, 6-14頁や, 津守真 (1992) 「いつの時代にも:コルチャックの著作を読んで」『幼児の教育』第91巻, 第2号, 4-9頁などを参照。
- ⁶ 新保庄三 (1996) 『コルチャック先生と子どもたち－ポーランドが子どもの権利条約を提案した理由』あいゆうびい, 参照。
- ⁷ 石川道夫 (1994) 「子どもたちと生きるために－ヤヌシュ・コルチャックの教育論」日本ベスタロッチャー・フレール学会編『人間教育の探究』第7号, 97-113頁参照。
- ⁸ 塚本智宏 (2004) 『コルチャック子どもの権利の尊重－子どもはすでに人間である』子どもの未来社, 塚本智宏 (2011) 「ヤヌシュ・コルチャックの子ども・教育思想の歴史的形成 (1890-1920年代): “子どもを人間として尊重する” 思想の形成を中心に」『名寄市立大学紀要』第5巻, 35-47頁などを参照。
- ⁹ 小田倉泉 (2002) 「ヤヌシュ・コルチャックの『子どもの現在』への一考察」日本保育学会編『保育学研究』第40巻, 第2号, 219-226頁, 小田倉泉 (2005) 『ヤヌシュ・コルチャックの生と教育思想に関する研究－子どもの権利思想に基づく教師教育論構築を目指して』東京学芸大学大学院連合学校教育研究科2005年度博士学位論文, 小田倉泉 (2007) 「乳幼児の意見表明権とその実施に関する一考察－J. コルチャックの権利思想を基として」『埼玉大学紀要教育学部』第56巻, 第1号, 95-107頁, 小田倉泉 (2008) 「乳幼児の『意見表明』と『最善の利益』保障に関する研究」日本保育学会編『保育学研究』第46巻, 第2号, 188-198頁などを参照。
- ¹⁰ 大澤亜里 (2011) 「サマーキャンプと青年コルチャック－子ども集団との初めての出会い」『教育福祉研究』第17号, 37-50頁, および大澤亜里 (2014) 「コルチャックの孤児院ドム・シエロットの設立と歴史的背景」『北海道大学大学院教育学研究院紀要』第120号, 53-81頁などを参照。大澤亜里 (2018) 「ヤヌシュ・コルチャックの教育実践」北海道大学2018年度博士学位論文。
- ¹¹ 塚本智宏 (2010) 「国際コルチャック会議の開催とコルチャック子どもの権利研究の動向」『人間と教育』旬報社, 第68号, 73-79頁参照。
- ¹² わが国におけるコルチャック研究の進展を阻害している要因として, コルチャックの資料が第二次大戦によって消失しているということだけではなく, 研究資料として用いられる資料が限定的であること, さらに当時のポーランドの関係者への聞き取りなどが進む一方で文献研究が進んでいないことなどが指摘される (小田倉 (2005), 前掲論文, 冒頭部分参照, vgl., Beiner (1996), *a. a. O.*, S. 469-487)。
- ¹³ 小田倉は, 「贖罪」という言葉でドイツにおいてコルチャックが伝播された動機を表現している (小田倉 (2005), 前掲論文, 冒頭部分参照)。
- ¹⁴ Vgl., Beiner, F. (1996), *a. a. O.*, S. 469-487.
- ¹⁵ コルチャックの本名はヘンリク・ゴールドシュミット (Henryk Goldszmit) である。1900年, 雑誌『Wędrowiec (放浪者)』で初めてヤヌシュ・コルチャックというペンネームを使用する (vgl., Beiner, F. (2008): *Was Kindern zusteht: Janusz Korczaks Pädagogik der Achtung - Inhalt - Methoden - Chancen*. Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus., S. 156)。
- ¹⁶ Korczak, J. (2000), *a. a. O.*, Bd. 3, S. 115.
- ¹⁷ Korczak, J. (2004), *a. a. O.*, Bd. 9, S. 50.
- ¹⁸ Vgl., Korczak, J. (1999), *a. a. O.*, Bd. 4, S. 202.
- ¹⁹ Ebenda, S. 10. コルチャック自身はここでは親がどのような条件で子どもをいかに教育してきたのかわかることはできないという意味で表現しているが, バイナーや小田倉によっては「わたし／われわれは子どもを知らない」というコルチャックの重要な基本姿勢として解釈され, 言及されている (vgl., Beiner (2008), *a. a. O.*, S. 19, 小田倉 (2005), 前掲論文, 90-92頁参照)。
- ²⁰ Vgl., Beiner (2008), *a. a. O.*, S. 100f.
- ²¹ Vgl., ebenda, S. 24.
- ²² 塚本智宏 (2004), 前掲書, 170頁。
- ²³ ドイツ語版全集目次を参照。Vgl., Beiner, F. (2002): *Janusz Korczak - Sämtliche Werke*. In: Korczak, J.: *Das Recht des Kindes auf Achtung. Fröhliche Pädagogik*. (Herausgegeben von Beiner, F.)

- Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus, S. 150-159.
- ²⁴ 例えば、1998年時点でのドイツ教育学におけるコルチャック受容についてのバイナーとウンガーマンによる論考などが収められている (vgl., Beiner, F./ Unger mann, E.(1998): Zur Rezeption der Pädagogik Janusz Korczak in der deutschen Erziehungswissenschaft. In: Korczak-Bulletin, 7, S. 4-11)。
- ²⁵ Vgl., Pelz, M. (2012): »Nicht mich will ich retten!«: *Die Lebensgeschichte des Janusz Korczak*. Weinheim und Basel: Ein Gulliver von Beltz & Gelberg.
- ²⁶ Vgl., Hebenstreit, S. (2017): *Janusz Korczak Leben-Werk-Praxis*. Beltz Juventa, Weinheim.
- ²⁷ Vgl., Dauzenroth, E. (1994): *Korczak, Deutschland und die Deutschen. Aus: Einführung in die Korczak-Paedagogik. Konzeption, Rezeption und vergleichende Analysen*. Beltz Weinheim, Dauzenroth, E. (2002): *Ein Leben für Kinder. Janusz Korczak. Leben und Werk*. Gütersloher Verlagshaus, Gütersloher.
- ²⁸ Vgl., Unger mann, S. (2006): *Die Pädagogik Janusz Korczaks: Theoretische Grundlegung und praktische Verwirklichung 1896-1942*. Gütersloher Verlagshaus, Gütersloher.
- ²⁹ Vgl., Kirchner, M. /Andresen, S./Schierbaum, K. (2018): *Janusz Korczaks 'schöpferisches Nichtwissen' vom Kind Beiträge zur Kindheitsforschung*. Springer VS, Wiesbaden.
- ³⁰ Vgl., Corsten, M./Leser, I. (2016) „Da gibt's ab und zu Zickenkrieg“. Kinderrechte und Konflikte unter Kindern. In: Weyers, S./Köbel, N. (Hrsg.): *Bildung und Menschenrechte Interdisziplinäre Beiträge zur Menschenrechtsbildung*. Springer VS, Wiesbaden. ここでは、自由のマグナカルタを中心とした子どもの権利の思想によって子どもの傷つきやすさ (Verletzlichkeit) を子どもの自律の承認へと結びつけることが試みられている。
- ³¹ Vgl., Kälin, W. (2018): Wahl- und Stimmrecht als Menschenrecht. In: Ziegler, B. /Waldis, M. (Hrsg.) *Politische Bildung in der Demokratie*. Lit Verlag, Berlin, S. 117-135.
- ³² Vgl., Steiger, S./ Maluga, A./ Bartosch, U. (Hrsg.) (2015): *Der Blick ins Freie. Im Diskurs mit Janusz Korczak*. Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn, vgl., Steiger, S. (2015): „Muss Sein so sein?“ Anmerkung zu Janusz Korczaks Magna Charta Libertatis. In: Bartosch, U./ Maluga, A./Bartosch, C./Schieder, M. (Hrsg.) *Konstitutionelle Pädagogik als Grundlage demokratischer Entwicklung*. Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn, S. 93-102.
- ³³ 2017年3月15日 (水) の同校へのフィールドワーク調査と同校の Elke Kühne 教諭より提供された資料に基づく。
- ³⁴ Vgl., Korczak, J. (2007): *Das Recht des Kindes auf Achtung; Fröhliche Pädagogik*. (Herausgegeben von Beiner, F.) Gütersloh: Gütersloher Verlagshaus.
- ³⁵ Vgl., Kerber-Ganse, W. (2009): *Die Menschenrechte des Kindes. Die UN-Kinderrechtskonvention und die Pädagogik von Janusz Korczak. Versuch einer Perspektivenverschränkung*. Budrich, Opladen & Farmington Hills, MI.
- ³⁶ Vgl., Fratini, A./ Hylla, Y. (2013): *Janusz Korczak - Pionier der Kinderrechte. Ein internationales Symposium: Herausgegeben im Namen des European Master in Childhood Studies and Children's Rights an der Freien Universität Berlin*. Berlin und München: Lit Verlag.
- ³⁷ Vgl., Beiner, F./ Unger mann, S. (2004): *Janusz Korczak in Theorie und Praxis. Beiträge internationaler Interpretation und Rezeption*. Gütersloher Verlag, Haus, Gütersloher.
- ³⁸ Beiner, F. (1982): *Janusz Korczak*. Heinsberg: Dieck, Beiner, F. (1997): *Korczaks Pädagogik der Achtung - eine sich-selbst-bescheidende, aber „fröhliche Pädagogik“*. In: *Wiener Lehrerzeitung*, 10, S. 1-3, Beiner, F. (2008), *a. a. O.*, Beiner, F. (2012): *Janusz Korczak - Wegbereiter einer demokratischen Erziehung?* In: *Pädagogische Rundschau*, 66, 1, S. 67-80, Beiner, F. (2015): *Janusz Korczaks Weg zur „Pädagogik der Achtung“ und Maria Falskas Beispiel einer „konstitutionellen Erziehung“*. In: Bartosch, U./ Maluga, A./Bartosch, C./Schieder, M. (Hrsg.) *Konstitutionelle Pädagogik als Grundlage demokratischer Entwicklung*. Verlag Julius Klinkhardt, Bad Heilbrunn.
- ³⁹ 小田倉 (2008), 前掲書, 191頁。なお、ここで小田倉が参照しているのはバイナーの英語による論考である (Beiner, F. (1997): “Korczak's Pedagogy of Respect”, In: *Dialogue Universalism*, No.9-10 Warsaw University, Warsaw, p.143-152)。
- ⁴⁰ Vgl., Beiner, F. (2008), *a. a. O.*
- ⁴¹ Beiner, F. (2008), *a. a. O.*, S. 49.

(主任指導教員 深澤広明)